

医学生の基本薬

渡邊裕司 編

＜書評者＞ 福井次矢 聖路加国際病院院長

本書は、医学生が臨床実習や卒業直後の研修開始時に困らないよう、数ある医薬品のうち重要かつ必須の医薬品のエッセンスをわかりやすくまとめたものである。

構成は、主として臓器系統ごとに10章に分けられていて、カルシウム拮抗薬から皮膚用内服薬（エトレチナート）まで、厳選された164種類の医薬品（＝基本薬）につき、適用される病気の概説、薬理作用、注意事項、エビデンスなどが記述されている。

基本薬の選定は、「臨床上で使用頻度の高い医薬品」かつ「医師国家試験にこれまで出題された医薬品」という2つの基準に則って行われたという。すべての医療者にとって「臨床上で使用頻度の高い医薬品」が重要なことは当然であるが、医学生にとっては、眼前に控えている医師国家試験に出題されたことのある医薬品かどうか、とりわけ重要な情報である。本書には、各基本薬に国試出題頻

度と臨床使用頻度を「★」「★★」「★★★」の3段階でグレードを付けていて、読者の学習モチベーションをいやが上にも高める構成になっている。

もう1つの大きな特徴は、基本薬に分類したもののうち特に重要な約50品目について、適応疾患の概説に先立って当該疾患の症例が提示されていることである。筆者の先生方にとって、それだけの数の症例を用意することはさぞ大変だったことと推察されるが、より臨床に即した知識を身に付けるためには、このような症例からのアプローチは最善の方法であり、この点も本書の価値を高めている。

編集にあられた渡邊裕司先生（浜松医科大学臨床薬理学教授）をはじめとする18名の執筆者の先生方は、みなさん臨床と薬理学に造詣の深い方々であり、多くの基本薬について記載されているエビデンスの項では、質（レベル）の

高い最新の研究結果が簡潔に記述されていて、大変有用である。

最後に、サイズが白衣のポケットに納まるようコンパクトな作りになっていることも、本書の利便性を大いに高めている。臨床実習などで病棟に出向いていても、教員の会話で耳にした薬、あるいはカルテの記載で目にした薬があれば、すぐにその場で本書を開いて当該薬に関する知識を確認できる。

私が医学生なら、まず丸1日かけてでも本書の全ページ（297ページ）に目を通しておき、その後は白衣のポケットに入れて、臨床実習で受持った患者が使っている薬はその都度本書でチェックし、他の標準的な教科書や文献から得た情報があればそれらも書き込んで、本書を黒く汚れるまで使いこなすであろう。そうすることで、医学部卒業までに重要かつ必須の医薬品に関する知識は強固なものになるはずである。

●B6 変型 頁344 2010年
定価3,990円
（本体3,800円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00834]
医学書院 刊